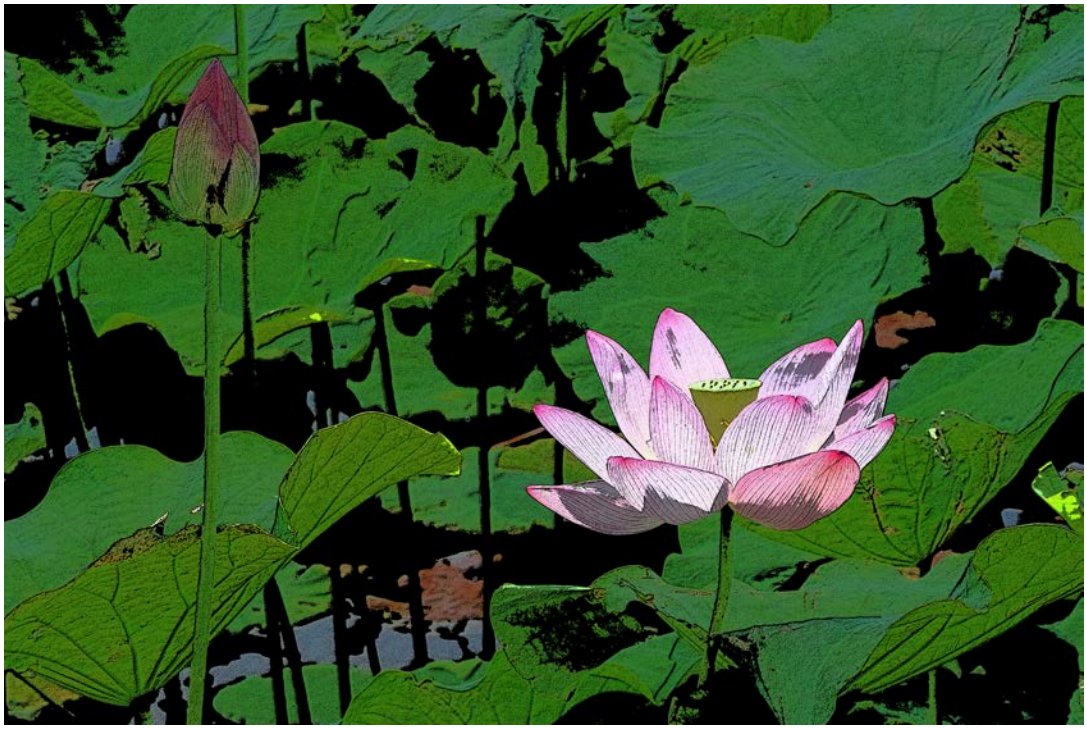
響　風

Hibiki　Winds



古代蓮【遠賀町】

あしや句会

第 11 号

はじめに

二〇一八年六月　昇先生の卒寿祝いの吟行句会を小浜で行った。「二年後には貝寄風句会の四百回記念があるので、また小浜に集まりましょう」と言って別れを惜しんだ。今年二〇二〇年五月、貝寄風句会発足以来四〇〇回目の句稿が届いた。発足から三十三年である。よくぞ続いたものと思う。その記念祝賀会の準備が年早々から進められていたが、またたく間に「新型コロナウイルス」が世界中に広がり、外出自粛や社会的距離（ソーシャルジスタンス）など、世の中の動きが制限され、祝賀会も延期せざるを得なくなった。元号も平成から令和に代わり、東京オリンピック開催の輝かしい年の予定だったが、目に見えない未知のウイルスには勝てない。昇先生の健康を願い、心配なく祝賀会ができる日を待つことにする。

「響風十一号」はコロナ禍前の三年分（二〇一七年～一九年）を掲載している。皆で一緒に吟行句会をする機会が少なくなったが、月々に生まれた句は記録として残しておきたいと思う。コロナの終息でこの句を作った頃のように、早く普通の生活が戻ることを願いつつ一読していただければと思う。また、吟行地や関連する写真がないので、ホームページに新たに加えた「フォトギャラリー」から抜粋した写真を掲載した。

令和二年七月　　江本由紀子

響風　第十一号　目次

■はじめに

■自選句

◇平成二十九年・・・・・・・・・・・・1

◇平成三十年・・・・・・・・・・・・・13

◇平成三十一年令和元・・・・・・・・・25

■フォトギャラリー掲載写真（抜粋）

◇花・植物・・・・・・・・・・・・・・37

◇鳥・動物・・・・・・・・・・・・・・39

◇祭・イベント・・・・・・・・・・・・42

◇海・川・・・・・・・・・・・・・・・44

◇山・渓谷・滝・・・・・・・・・・・・46

◇その他・・・・・・・・・・・・・・・49

自選句

平成二十九年

平成二十九年一月投句　【十日恵比寿神社】

スカイプで時空を解きて御慶かな　勝利

福笹のはためく風を担ぎゆく　真理子

皺に薬付けくれ叱りつつ　節子

贈られし石を親しく紅梅に　由紀子

柄先まで青き柄杓や初手水　光子

スケートの靴滑らかに踏み替へし

タクシーは名護屋城址へ雪しまく

恵比須社の鯛の口より初手水

お隣りは沖縄流の注連飾

手から手に鷽を替へつつ願ひつつ

ドアホーン大寒に立つ人の声

鬼やらふ大松明の揃ひ立つ

県庁のロビー行き交ふ戎笹

友の声聞こゑたやうや梅ふふむ

寂しさは後につのりて寒の梅

平成二十九年二月投句　【住吉神社・節分祭】

梅一輪茶店の客の増え初め　桃の弓放つ葦の矢厄払

おみくじを禁じ花芽の梅の枝　勝利　護摩の燠残し節分法話かな　真理子

艶聞を小耳にはさみクロッカス　墨染の雲の絶え間の月冴ゆる

海峡を前にのびのび春告鳥　鬼の舞ふ本堂節分前夜祭

迷ひつつ同じ道行く春の町　節子　やうやくに一つ飛び来し福の豆　由紀子

雪しろの川を横目に細き径　三方に春呼ぶ葦矢放ちをり

雪しろや町へ列車の日も近し

梅三分出番待ちせる園児らに　光子

我が屋根の上にオリオン冴返る

平成二十九年三月投句　【那珂川町・裂田の溝】

啓蟄やマラソンの列首都に伸ぶ　青き踏む旧道観世音寺まで

沢光る早春の音ちりばめて　勝利　見下ろせる能古志賀島青き踏む　真理子

老梅の支柱の釘を新らしく　窓を突き壊し迷走春の猪

測量の杭立ててあり春の川　記紀の世の疎水を今に青き踏む

夜の庭散らかしたままうかれ猫　節子　家毎に小橋と汲ん場春の川　由紀子

里人に一段高き初桜　雛置かぬ白蓮の部屋花一輪

共に行く筑紫の野辺の初桜

野遊や川音を聞き風を聞き　光子

ふたすぢのせせらぎの音水の春

平成二十九年四月投句　【福岡城址】

煙立ちぽん菓子破裂春うらら　勝利

牧渡るいななき長く春惜しむ

手水鉢ふたひらなれど花筏

春惜む小鳥も人も野にありて　光子

花満つる城へ石垣連なりて

一時にみな咲き急ぎ庭の春

蘆わかば潮見櫓を正面に　真理子

濠の水弧を描きつつ花筏

携えし写真に語り春惜しむ

花の屑濠の蓮葉を縁取れり　由紀子

花吹雪多門櫓を越えゆけり

猫通る鯛釣草の花揺らし

【お休み】　節子

平成二十九年五月投句　【西公園】

老鶯に観音様の声がして
誕生石エメラルドとて豆の飯
シオカラが縄張り決めて夏に入る

勝利

薫風や路地の隅々吹き渡り
防波堤上下するかに船卯浪
若葉風身重の母の手をとる子

真理子

早々と矢車だけを回しをり
石炭のかがり火灯す祭町
ライ麦と名札立てられ麦熟るる

節子

潮風に玉巻く芭蕉荒津山
町名は「港」薄暑の船溜り
卯浪立つ河口平家の五輪塔

由紀子

さくらんぼ路地の静かな日曜日
武者幟揚げをる人に道を聞き
豆飯を持たせて駅へ次は秋

光子

平成二十九年六月投句　【香椎宮】

楠若葉勅使道なるしゃれたカフェ　盛り上がる樟の根涼し勅使道

神域の闇にすつくと今年竹　勝利　竹の皮散りて宿禰の井のひそと　真理子

魚採る刹那の鷺の五月闇　膝を折り水無月に汲む老の水

踏切をわたる緑の勅使道　楠の香の緑陰つづく勅使道

丹の色の柵巡らせて木下闇　節子　棺掛の木に引き返す木下闇　由紀子

宮裏の名水静か蝸牛　草の闇深まるほどに蛍の火

取り置いてくれし実梅をジャムにして

緑陰の井戸に伝へて不老水　光子

古宮へ樒の花の匂ひけり

平成二十九年七月投句　【野河内】

ジルバ弾け絡むスカート夏館
玉虫の身重のごとく飛び行けり　勝利
蟻猛る近くに蹠くむかでをり

川音に聞き取れぬ声滝近し
気がつけば金魚に話かけてをり　節子
渓谷の奥へ誘ふか秋の蝶

夏霧に立ちて無言や普賢岳
渓谷は八重に折れつつ滝口へ　光子
風涼し身内の息を入れ替へて

竹落葉そうめん流しの小屋朽ちて
父に手を引かれ谷川裸の子　真理子
人影もなき島の山夏の霧

渓谷の岩の窪みに水馬
崩れゆく峰雲に雨気にかかり　由紀子
尾を振ってくるりとそっぽむく金魚

平成二十九年八月投句

しほからの影に秋立つ気配あり
戦闘機一直線に峰雲へ　勝利

一輪が咲き初めてをり露地の萩
ダンゴ虫のろのろ歩く残暑かな

バス降車ボタンを押して盆の僧　節子

千切れたる翅をさかんに秋の蝶

秋立つやここに出会ひし頃思ふ
戸を閉てて無為なるままに秋暑し　光子

水打ちてついと暖簾をくぐりけり

書かむとす漢字忘れて秋暑し
山査子のカクテル色の織女星　真理子

隈笹のふち色白く秋立ちぬ

虫を食む蜥蜴ひくひく動く腹
野分波出入りの舟のなき港　由紀子

孫送り届け残暑の家路かな

平成二十九年九月投句　【久留米・クリーク・古墳】

夏草や釣少年の赤帽子
筑後路や遠山青く彼岸花　勝利
瓢箪の小さきを残し日除枯る

秋の陽に竹干してある神の庭
うっそうと古墳の小径草の露　節子
花殻をつけた零余子の売られゆく

いつかいつか言ひをる尾瀬の花野かな
霧深き但馬は偲ぶ土地となり　光子
船着き場らしき石段蘆原に

踏み入りし墳墓の蜘蛛が傘に
茅干す匂ひ籠りて秋の宮　真理子
うなぎ屋の寄進多かり放生会

露けしや周濠二重の古墳山
新涼の風に神事の竹を干す　由紀子
イヤフォンをはずし花野の風をきく

平成二十九年十月投句　【海の中道海浜公園】

線香に木犀の香の仄かなる
残照のほとぼる街に上がる月　勝利
秋潮に長き桟橋軋み鳴く

駅員の交わす挨拶秋の暮
小さな手にしっかり握る木の実かな　節子
店先で夷布売る手芸店

耳遠くなれど手は利き夷布
宿坊の他に灯の無く身に入みぬ　光子
しばし陽にぬくもる北の刈田かな

基地の跡なりしコスモス今盛り
秋野菜美しく添え女シェフ　真理子
誓文や銀座通りはアーケード

ウォーキング一団の過ぎ秋桜
からくりの唐子くるりと秋祭　由紀子
高山の秋や屋台の曳き揃ふ

平成二十九年十一月投句　【福岡城址・平尾山荘】

凩やオリオン真うへ月ひがし　勝利

凩は荷馬車の車輪抜けて来し　真理子

子供待つ掃除ついでに冬支度　節子

消防車走る落葉の住宅街　由紀子

鴨の群れ園児の群れに集められ　光子

冬暖か六畳二間の展示室

語ること多きは幸と小春の日

虚空蔵は守り本尊小鳥来る

山の木のいつしか庭に小鳥来て

囚われの身ほとり描き冬ざるゝ

貫きし志あり破れ障子

タクシーを降りて小春の坂の道

美しき声まだ耳に後の月

凩に乾きし魚の鰭の反り

吟行の下見の城址薄紅葉

平成二十九年十二月投句　【大丸別荘】

郵便屋さんの赤箱小春の日　勝利
葦原は雀の渋谷交差点　真理子
落葉積みにっこりと笑む石恵比寿　五枚活けられし葉蘭や冬座敷
宿雪駄もみじ落葉を踏んでみる
年長の娘の声高し社会鍋

極月の産婦人科の待ち時間　節子
ＡＴＭ向かひマスクを外しをり　聖樹なき老舗旅館の太柱
箸お椀持参餅つき会場へ　迷路めく渡り廊下や落葉積む
帰りには足早に過ぐ社会鍋

杉玉のあたらし蔵にはやも雪　由紀子
炭熾し築百年の帳場かな　光子
温泉の宿の離れへつづく冬灯

自選句

平成三十年

平成三十年一月投句

遠山に朝日明け初め霜の里　手締めして解き初む初荷五六人

表向き裏向きに絵馬春を待つ　勝利　寒晴や朽ち葉啄む鳥水漬き　真理子

原チャリが凍町を切り裂いて行く　紫陽花の黄葉のはずれ落ち冬芽

本殿の裏より雪の落ちる音　青空の檜皮葺よりしずる雪

杉の葉はすでに集まりどんど焼　節子　昼の湯のほどよき疲れ小正月　由紀子

祝い歌初荷の車送り出す　猿曳きの袖咬む猿の細き脚

母許の雪の深きを案じつつ

初句会後は湯治の客となり　光子

夜は雨になるらし梅の咲きさうな

平成三十年二月投句

野焼跡阿蘇を統べたる夕焼かな　勝利

コーヒーの香に包まれてクロッカス　真理子

バス停に降りれば運河炬燵舟　節子

やっとすれ違ふお堀のこたつ舟　光子

早春賦歌声聞こゆ資料館

満ち潮を待つ船溜まり蘆の角

小さき文字葉書うづめて寒見舞

鉄橋を連ね越後へ雪解川

ふと覚めて除雪車の音かすかにも

くさぐさの雛のお道具細やかに　由紀子

おほかたは海苔舟川の底見ゆる

噴煙の一つは阿蘇野焼く煙

盆梅の古木居並ぶ玉座の間

豆を撒く園児泣きつつ鬼に撒く

西郷どんの額字のびやか梅ひらく

平成三十年三月投句

鵜ならしの神事鵜と主低頭し
しゃがみこみ何か探す子春田かな　勝利
菜の花や幼児は背伸びしてピース

逃げ惑ふ小魚の川みくさ生ふ
飛行機は低く北へと鳥曇　節子
町の音遠くに聞こゆ春一日

吊り革の上ぬいぐるみ春のバス
春野菜白湯に味はふ苦味かな　光子
をがたまの花の梢に雲流れ

東風の川石に鵜のゐて動かざる
虎枝や地区パトロール自転車で　真理子
鵜ならしや娘鵜匠の父を継ぎ

雲雀東風羅漢五百の顔さまざま
梅ケ香に寝息おだやか看取りの夜　由紀子
春潮や化石の混じる崖に寄す

平成三十年四月投句

音の無き雨に点りし残り花
声たどれば樋にちょこんと雀の子　勝利
マンションの如き船着き花吹雪

花屑の川を渡りて登校す
熊ん蜂一匹お城の広い空　節子
園長は坊さま園児の花まつり

白髪ほめ肌色ほめて豆の花
てんでんの茶飲み話や豆の花　光子
国会に文句の母や風光る

落書きのごと這い上がる水の虻
橋潜るたび白秋の唄のどか　真理子
地震ふりし城とも知らず雀の子

炭坑節踊る輪にゐて月おぼろ
浅草の風に重たき八重桜　由紀子
日の匂ひ藤の匂ひの磴上る

平成三十年五月投句

ことさらに眼の優しくて袋角
夏野菜を語る白い歯おすそ分け
青蘆を揺らさず鷺の現れり

目印の棒立ててあり文字摺草
大切に守られ育つ袋角
大鳥居からの参道楠若葉

玄関に移りし北斗春の宵
通学路ねぎ花ちょんとつつかれて
母の日や植ゑし野菜の名を聞きて

勝利

節子

光子

ホトトギス夜々鳴く声の眠りかな
母去にしふるさと枇杷の遠あかり
臆病な鹿に続けり袋角

おもむろに立ちてすり寄る袋角
卯波寄す朱の回廊や厳島
禅寺の老杉の磴上りけり

真理子

由紀子

平成三十年六月投句

紫陽花の迫りて人の波曲がる
梅雨曇水面にひょいと針を投げ　勝利
埋もれつつ花摘む庭師菖蒲園

農機具が車道を走る田植え時
立消えの鵜飼の旅の計画書　節子
豆爆ぜるやうに弾ける雹の庭

シエスタと名付けし医院さくらんぼ
錆びつきし英彦山線や夏の草　光子
万緑の英彦山の山気を胸底に

梅雨の海茫々雲仙見えざりき
水運のかって港や花菖蒲　真理子
手のひらを蹴って逃れし螻蛄の闇

釣道具抱え蚊帳吊草の土手
炭坑の遺構台座や小判草　由紀子
外灯なきところまで来し蛍狩

平成三十年七月投句

土用干まだ梅の色浅かりき
土用干去年の梅は残り五個　勝利
梅紫蘇の庭に熱れて土用干

口開けて烏喘ぐや日の盛り
目印の雲に背泳ぎ曲がりをり　節子
一つずつ干梅甕に収めけり

嵐来る月下美人の咲く夜に
打ちつける雨粒夏の灯のにじむ　光子
夏霧の深き朝なり一人居に

新しく塗りたる壁に蝉の殻
登山杖引く四五人やバス停に　真理子
十歩でも開いては閉じ日傘

夕焼ける干潟に潮の縞模様
池底の朽葉泡立つ炎暑かな　由紀子
滴りの山分け入れば摩崖仏

平成三十年八月投句

炎帝に蕾を焼かれ佇つカンナ　　勝利

遠花火遅れる音の懐かしく

車椅子寄せし秋桜今年また

白粉の花に社宅の子の寄りて　　光子

宝箱底に登山のバッジあり

炎帝につきて耿耿火星出づ

川石に動かざる鵜や秋暑し　　真理子

腹白く蜥蜴の骸らしきもの

火星見て土星分からずくつわ虫

青葡萄石橋あまた残る郷　　由紀子

白粉花や軒に置かれし猫車

そそり立つ崖に霊堂秋のこゑ

【お休み】　　節子

平成三十年九月投句

曼殊沙華初む一輪の棚田かな　勝利

中秋や浅くなりけり女性帽　真理子

宵闇に懐中電灯来るらしく　響き合ふ楽の音長き夜の更けて

雲間より現れ出たる鷹渡　秋雨や玻璃の守宮の尾の螺旋

点点になるまで高く鷹柱　節子

集落へ一本の道秋出水　掴みたる芋虫箸に踏ん反りて

裏山は寺領に続き竹の春　中世の荘の名残りや稲の秋

藤寺と言はれて久し竹の春　光子

荘園を守り継ぐ村の曼珠沙華　由紀子

庭生りの紫蘇の実漬けて持たせけり　国東に札所いくつや水澄めり

平成三十年十月投句

転がりし若き木の実の秋の翳　勝利
木犀の香に振り向きぬ前の人
上流の暮らしも掛かり下り簗

町内の子供が配る赤い羽根　節子
瀬戸内の島に一日秋の雨
鷹の絵を風に揺らして鳥威

母の髪洗ってやりぬ秋日和　光子
十六夜や名残惜しみつ日々重ね
この先は五島の岬鷹渡る

研ぎし刃を翳す庖丁秋の晴れ　真理子
掃き寄せる紅葉夕べの色さらに
畑よりの煙は川へ鵙高音

水軍の島に露けし供養塔　由紀子
酒造場の高き煙突いわし雲
ひと雨に色を深めし実むらさき

平成三十年十一月投句

赤ペンキの印ある路草紅葉
常盤木の社の杜に冬紅葉　勝利
薄の穂散歩の犬の影長く

カーテンに時折影や散る紅葉
本堂に満ちる念仏十夜寺　節子
落葉掃く夫時折空見上げ

看取にも旅の暇や秋日和
柳川の堀の水面の石蕗明り　光子
あふちの実くぐり川舟行き交へり

世事一日暮れてしまひぬ翁の忌
風にのる綿虫に意思ありやなし　真理子
一夜さに落葉あつまる駐車場

君そこに居る遺句集や冬ぬくし
釣人の影に寄り添ふ冬の鷺　由紀子
水煙の空青くして銀杏散る

平成三十年十二月投句

初雪に枯山吹の茎緑
ＰＭの夕焼赤く冬にいる　勝利
朝鵙や筑後の盆地霧の中

子供らに囲まれて父蕎麦を掻く
ビオトープ池も畔も冬ざれて　節子
ひっそりと咲きひっそりと菊枯るる

海原も苔も紅葉の散る下に
散紅葉大海原の渦となり　光子
無住寺となりてひとしほ冬紅葉

手袋に残る形のわが手なり
手袋を脱ぎし母の手やはらかく　真理子
吹き曝す玄海の島虎落笛

冬の虹出船の水脈の消ゆるまで
着膨れて流星を待つ十五分　由紀子
極月の迎賓館へ花鳥の間

自選句

平成三十一年・令和元年

平成三十一年一月投句

灯消し鷺替いよよ始まりぬ　補ひてともに健やか寝正月

境内に声かけ合ふて鷺替へて　節子　ぬた場らし跡の乾けり寒施行　真理子

初めての餅と喜ぶ礼者かな　まっさらの十年開く初日記

偶然を装ひ二人初詣　浮子に乗る鵜に迫りゆく鴨の陣

傷心の行く山道に冬苺　勝利　鬼すべの松明を曳く煤の顔　由紀子

御降や独り住まひに音もなく　写楽絵の目ほどふくらみ芽水仙

年ごとに願ひつましく初明り

初明り素直な心持ちて句を　光子

夢に覚めしんしんと聞く雪の音

平成三十一年二月投句

春雨の雫たらすや軒の鳥
立春の光差し込む地下遺構

だんだんと細くなる径いぬふぐり　節子
夫好むことに相槌寒明くる　真理子

靴を脱ぎ汀に拾ふ若布かな
戸口より戸口へ走るうかれ猫

猫さかる独居老人うとうとと
鬼やらひ鬼のひれ伏す神楽殿

撫でてみて逆撫でてみて猫柳　勝利
瀬の音の微か野梅の紅仄か　由紀子

見上げればさわりさわりと春の鷺
貯水池の底のひび割れ笹子鳴く

夢うつつ行きつ戻りつ春の風邪

八百正は大根献じ鬼やらひ　光子

まんさくや修験の山の道標

平成三十一年三月投句

ぞくぞくと人山寺の御開帳　木蓮の花麗しくあっけなく

行きずりの人に椶の芽いただきぬ　節子

春の川沿ひにかけっこ通学路　蛸壺の並びし浜や春の昼

ひょいと足出して飯蛸壺の口　真理子

揺るるはずなく揺らめきて春障子　椿落つ一夜造りの鬼の磴

戒めかはた励ましか春の雷　勝利

早春のひかりを集め摩崖仏　由紀子

揃へ置くヒールに乾き春の泥　風光る山に二つの摩崖仏

潮調子見極め白魚漁師かな

白魚簗吾が編みたると漁師かな　光子

埋め戻す遺構の上の草青む

令和元年四月投句

三角の屋根の先より春の月　　折り畳みテーブル花下に親子連れ

半身を晒し砂出す浅蜊かな　　節子　　棹を手に船頭花下の船着場　　真理子

下校の子鵲の巣を教へくれ　　雪洞を連ね境内八重桜

面接の固き机に窓のどか　　遥か来しアルハンブラの春灯

桃の花将門塚はこの近く　　勝利　　乗り継ぎの空港に見る春の雪　　由紀子

街の灯はみな蠢いて春の闇　　中世の城春翳のアラベスク

遺言めく母の言葉も春灯下

花冷の夜にも母の厨事　　光子

気がかりをみな話しおき夜半の春

令和元年五月投句

登校路踊子草の曲がり角
ハイウェイの風向示す鯉のぼり　節子
川岸に観覧席も祭客

川渡る水道管に蔦若葉
初恋の芥子粒ほどや祭の夜　勝利
忍冬の花の香ゆらと宵の縁

散りかかるもの散り尽くし青嵐
母の日や長きおしゃべりいつになく　光子
リハビリの二人三脚樟若葉

遺産とは成りし廃坑忍冬
サンダルを値切りし頃も街薄暑　真理子
嫁となる我を迎えし祭の夜

つばくらめ平家滅びし渦を飛ぶ
筑豊や川に神輿の二基荒ぶ　由紀子
すいかずら古墳壁画の謎多し

令和元年六月投句

城址の百足虫と水城見下ろしぬ
ががんぼの足だけ残るガラス窓　節子
頼りなく厨を歩く子蟷螂

声援に応へる鵜匠目は向けず
焼酎の禊に匂ひ立つ実梅　勝利
拝殿の裏は物置宮祭

残鶯や日々穏やかにとぞ願ふ
慈しみ日々過ごせるや額の花　光子
明易や眠る薬を飲みをれど

六月の月熟るゝかに山の端に
紫陽花の参道に傘またひとつ　真理子
夾竹桃褒められもせずなほ元気

残鶯や夕日の端に鳴きつくす
暮れがての紫陽花山にサキソフォン　由紀子
白ばかり浮立つ夜の菖蒲池

令和元年七月投句

寝袋を六本並べバンガロー
囲碁を打つ商店街の涼み台　節子
重たげにうなだれ雨の日車草

川蜻蛉揺れ綺羅と揺れ背の緑
花町の門の跡地にねむの花　勝利
ひび割れて白き泥道凌霄花

星の出て少し恋してバンガロー
デイケアの模擬縁日のラムネかな　光子
眠られぬ夜の香水の重たかり

夫と犬それぞれ寝莫蓙よく眠り
鬼百合に雨降り止みて降り止みて　真理子
バンガローこんなところに泊まるとは

悔いなしと言えぬ看取りや梅雨深し
百合好きな母に最期の百合を置く　由紀子
流鏑馬の馬場に清めの白雨かな

令和元年八月投句

窓閉めてまわる夕立一軒家
雷鳴に動き固まる幼児かな
それなりの甘さと甜瓜を売る
送火の灰は君のと同じ色
慣れてきし霊棚作り手は老ひぬ
田水守り畔は銀河に沿うてをり
静かなる余生を得しや霧深し
デイケアの休みの昼のビールかな
秋暑しもういぢわるは言はぬこと

節子

勝利

光子

なつかしき父の筆跡星月夜
好きなことしていてもなほ秋暑し
見えもせぬ乳を吸ふ嬰稲の花
砂利道の乾きし音や夏越祭
射手は汗見せず三的射ぬきをり
丑三つの空に流星つづけざま

真理子

由紀子

令和元年九月投句

開聞岳裾野を濡らす秋の潮　清掃の公園おんぶバッタ飛び

秋の潮島につながる砂の道　節子　鉦叩さみしけれども庭豊か　真理子

トロ箱に曲がる太刀魚重ねられ　逸れ鷹低く流れて尾根に入る

太刀魚を切る包丁の無頓着　鍾乳洞幾千年を水澄みて

稲妻に曝け出されし夜の雲　勝利　釣り糸の太刀魚銀に波打てり　由紀子

偲ぶ恋問ひつ分け入り竹の春　稜線を神域となし今日の月

一日の無事を安堵や鉦叩

無造作に太刀魚売りて港町　光子

敬老の日の母の声大きくて

令和元年十月投句

移り来て縁側で見る虫送　　一叢の花に飽くなき秋の蝶

扇風機の残る拝殿菊日和　　勝利

恋愛は下手で夜長のシューベルト　　由紀子

引越して空部屋の窓秋の声　　秋潮の退いて砂鉄のひかる浜

古城址の堀の草揺れ秋の声

秋晴に病院三つはしごして　　光子

お休み　　節子

駄々こねる夫なだめつつりんごむく

姉の味噌手作りなりし茸汁

葱の種土産に旅の秋暮れて　　真理子

斎田を誇りの村や虫送

令和元年十一月投句

赤レンガ色を濃くして夕時雨　夫婦岩幣白々と神迎

山寺の山門静か石蕗の花　節子　耳遠き女あきんど冬紅葉　真理子

静かなる白丁の列神迎　笑み湛え説くや小春の宣教使

鵯騒ぎ手水の音の静かなる　残照の立山連峰神迎

葡萄棚ワインレッドに紅葉し　勝利　錦秋やスイッチバックの駅に降り　由紀子

裏路地にパン焼く匂ひ小春風　雲去りて初冠雪の奥穂高

天から降りそそぎたるごと石蕗の花

冬立ちぬ恙無き日の続くやう　光子

小春日の温泉宿にゆるりひとときを

令和元年十二月投句

気遣ひの我慢の果ての大くさめ　冬うらら河童寝そべる川下り

赤子抱く母親父親マスクして　節子　やわらかな冬日欄間の透かし彫　由紀子

リビングに機影よぎるや日脚伸ぶ　掘割に戸毎の汲水場石蕗の花

身じろぎもせず冬の綿雲五枚

大綿のむこうの山の静かなる　勝利　お休み　真理子

大綿をはたける丈になりたしと

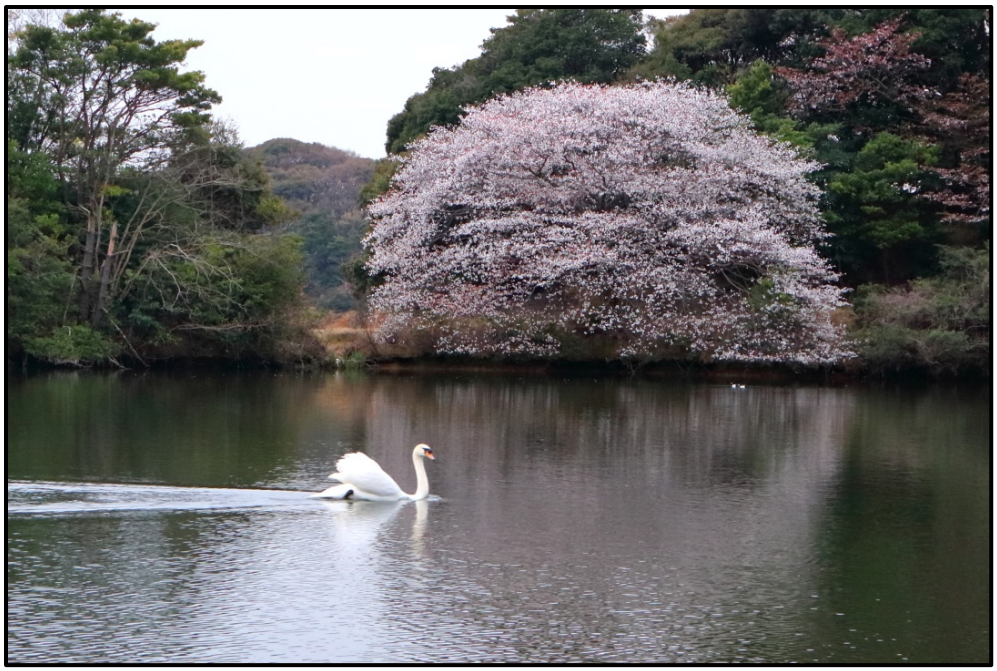
大綿や猫の昼寝のまだ続き

冬芽立つ石垣のみの夢のあと　光子

吾を頼りきつたる夫や冬帽子

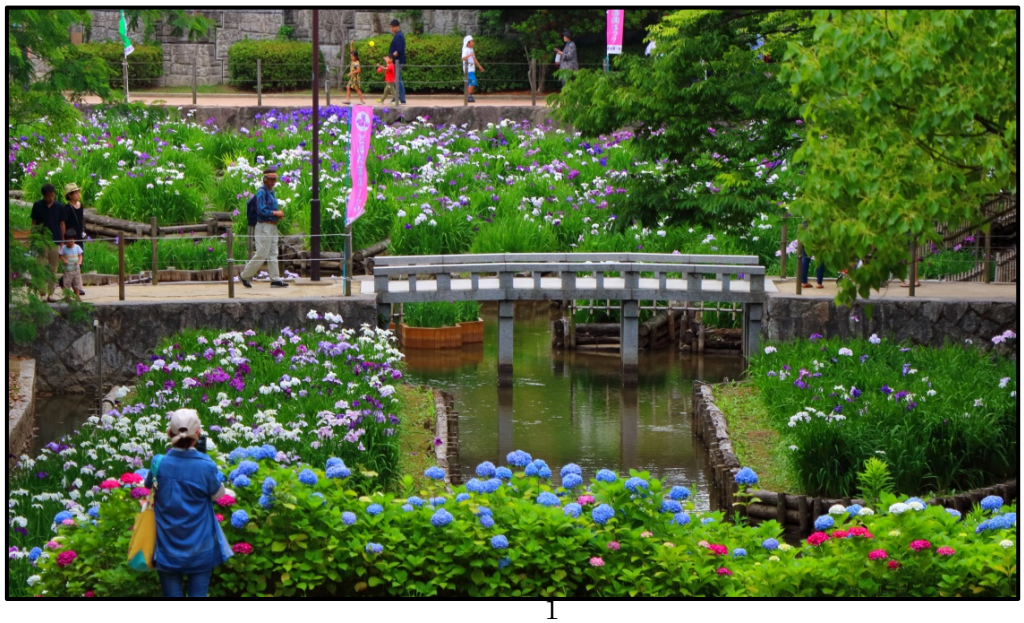
フォトギャラリー掲載写真（抜粋）

■花・植物（その一）



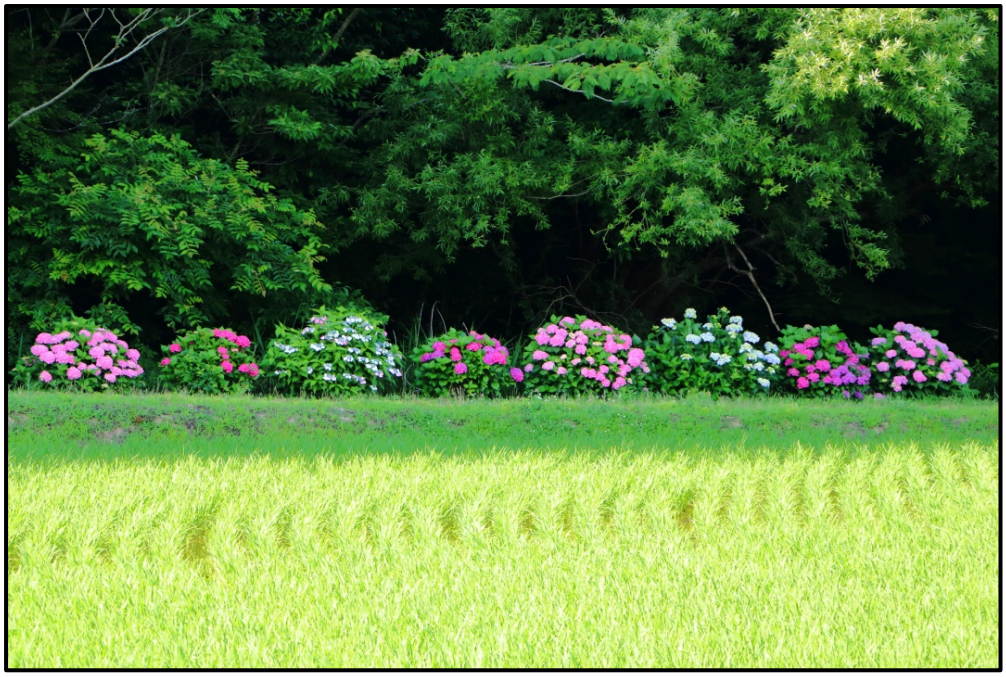
頓田貯水池（若松区）

長崎鼻（大分県）



夜宮公園（戸畑区）

■花・植物（その二）



田染荘（大分県）

夏井ケ浜（芦屋町）

遠賀川河川敷（水巻町）

■鳥・動物（その一）

シジュウカラ

ジョウビタキ雄

マガモ

■鳥・動物（その二）

カワセミ

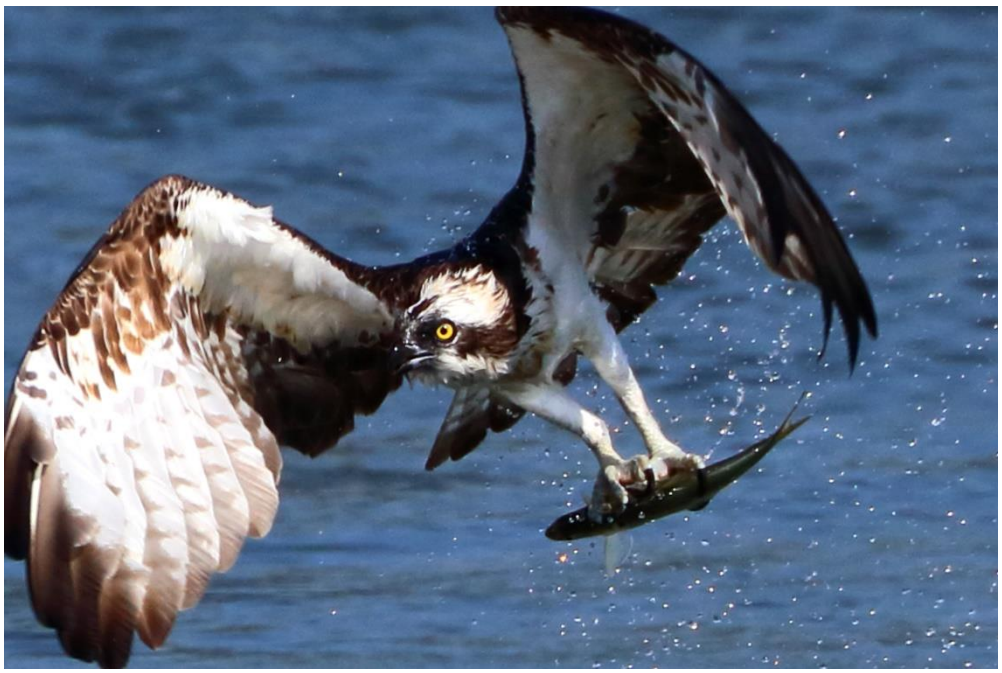
モズ

メジロ

■鳥・動物（その三）

コブハクチョウ

オシドリ雄



ミサゴ

■祭・イベント（その二）

鬼すべ神事（大宰府）

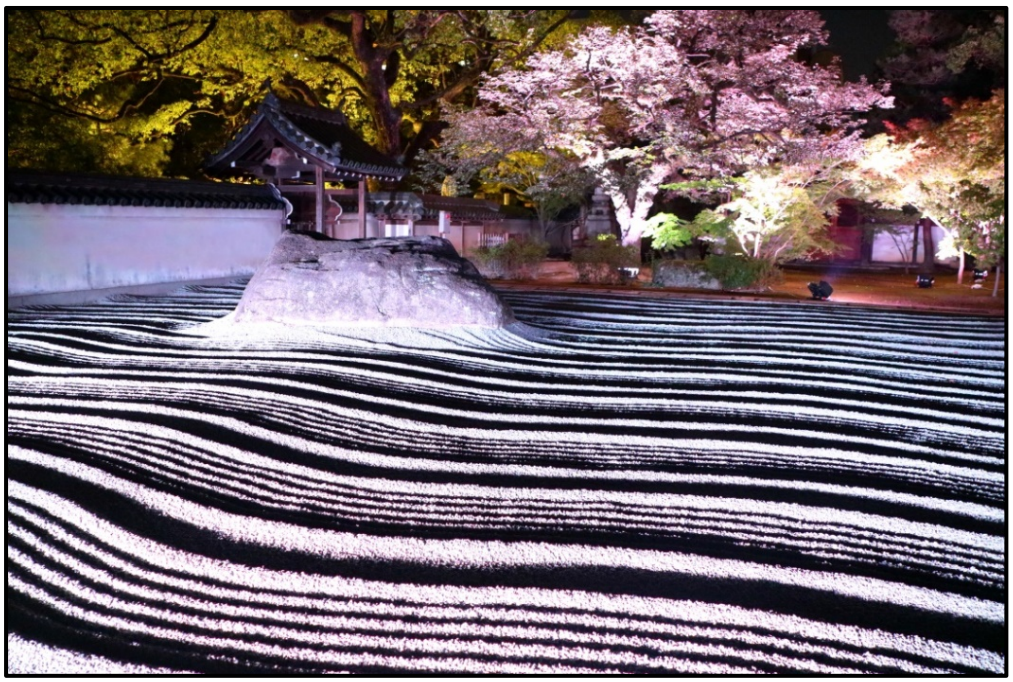
節分前夜祭（櫛田神社）

先帝祭（赤間神宮）

■祭・イベント（その二）

博多祇園山笠（福岡市）

流鏑馬神事（宇佐神宮）



千年燈夜（承天寺）

■海・川（その一）

若松北海岸（若松区）

遠見ケ鼻（若松区）

堂山（芦屋町）

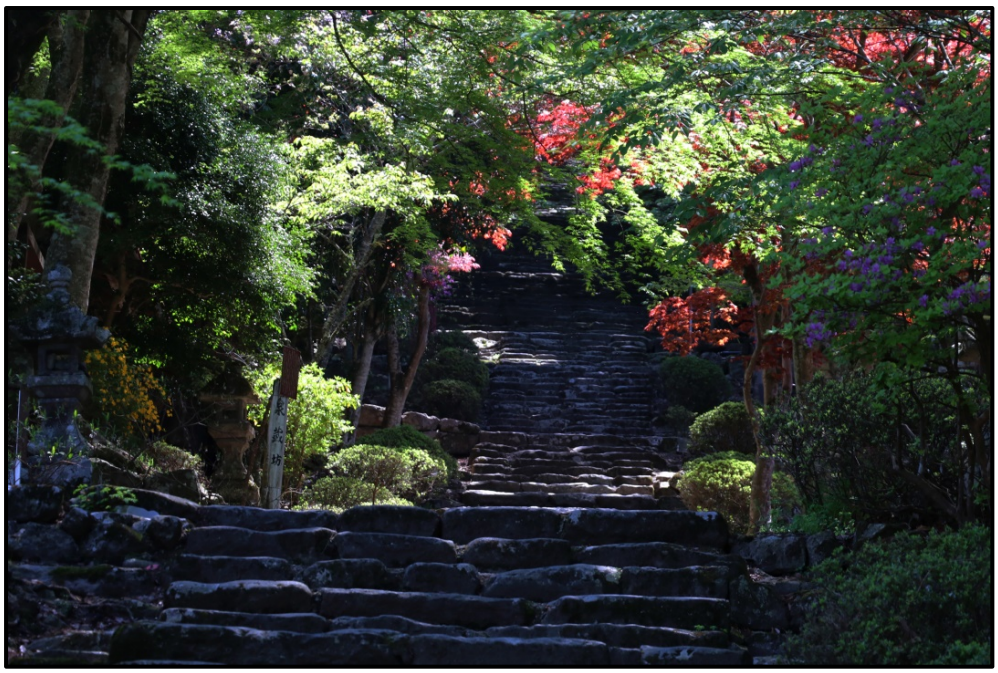
■海・川（その二）

真玉海岸（大分県）

狩尾岬・板状砂岩（芦屋町）

遠賀川河口堰（芦屋町）

■山・渓谷・滝（その一）



英彦山（添田町）

田染荘（大分県）

鍋ケ滝（熊本県）

■山・渓谷・滝（その二）

猿岩（壱岐）

田染荘（大分県）

上高地（長野県）

■山・渓谷・滝（その三）

菊池渓谷（熊本県）

白川郷（岐阜県）

富貴寺（大分県）

■その他（その一）

野焼き（平尾台）

鯉のぼり（中間市）

元乃隅稲成神社（山口県）

■その他（その二）

若戸大橋付近夜景（高塔山）

工場夜景（八幡西区）

門司港レトロ地区（門司区）

響　風－Hibiki　Winds－

あしや句会　第 11 号

令和２年７月発行

発行人　：江本　由紀子

編集担当：江本　　寛